
記憶

ライカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
記憶

【Nコード】
N7286E

【作者名】
ライカ

【あらすじ】
楽しい毎日を過ごしていた『舞』。突然その日は崩れてしまう。昨日が消えてしまうどうしてなのか…舞は一体どうしてしまったのか？

前兆（前書き）

この、お話は専門の知識があって書いたものではありません。具合の悪い人はちゃんと病院で診てもらいましょう。

前兆

「じゃあねまた、明日」

手を振る友人。

私も手を振りかえす。

「うん、また明日」

家路につきながら今日の事を思い出している

「先生何であんな何にも無いところで転んだんだろ。」

先生っておちよこちよいなのかなあ」

クスクスと笑う

…？

「あれ？」

「先生って？」

誰？

今、私何を考えてたの？――

何だか怖くなり、走って家に帰った。

「ただいま!!」

「お帰り、早かったね」

お姉ちゃんが出迎えてくれた。

「あのねあのね」

「ハイハイ落ち着いて

ほら、荷物置いて

ほら、これ飲みなよ」

お姉ちゃんが飲もうとしていた麦茶を私にわたす。

私は一気に麦茶を飲み干す「で、どうしたの？」

「あのね、さっき考えてた事が思い出せないの」

「うん…で？」

「なんで？」

そんな風に聞かれても困るがお姉ちゃんは

「舞ちゃんはうっかりさんだから？」

お姉ちゃんらしい言葉が返ってきた。

「そうかなあ」

私は、ほっとして気が抜ける

「…ん…ちゃん、舞ちゃん！！」

「え？なに？」

「なにじゃないでしょ

いい加減着替えておいで」

私は帰ってきた時のままの格好でソファーに座っていることに気づいた。

「はい」

勢いよく立ち上がり部屋に着替えに行く。

トントン

「舞ちゃん、入るよ」

お姉ちゃんが部屋に入ってきた

「お母さんたち帰り遅くなるって言ってたから…あれ？舞ちゃん、まだ着替えてなかったの？」

「お帰り、お姉ちゃん。」

いつ帰って来たの？」

「何言ってるの？」

お姉ちゃんが訝^{いぶか}しげな顔をする。

「さっき私と話してたじゃない」

私は、訳が解らないという顔をする。

「あれ、私いつ帰ってきたの？」

私は頭が混乱して何も考えられなくなっていました。

ズキッ

「痛い」

私は頭を抱えこむ

「どうしたの舞ちゃん

大丈夫？」

「解らない、頭が凄く痛い」

「舞ちゃん、とりあえず横になって！」

お姉ちゃんは私を助け起こしてベットに寝かせる。

「今、救急車呼ぶから！！」 飛び出して行こうとするお姉ちゃんを
引き留める。

「大丈夫だよ

…寝てれば治るよ」

痛みをこらえてお姉ちゃんに言う

「でも…」

心配で仕方ないお姉ちゃんはそれでも説得しようとする

「本当に大丈夫だからね

寝てれば治るって」

「舞ちゃん…」

「明日になっても治まおさって無かったら病院に行くから」

「解ったわ。

じゃ、何かあったら直ぐ呼んでね！」

そう言って渋々部屋を出ていくお姉ちゃん。

私は、痛みを堪こらえながら眠りについた。

発症（前書き）

この話は、専門の知識があつて書いたものではありません。具合の悪い人はちゃんと病院で診てもらいましょう。

発症

「うーん！良く寝た！！」

私は体を起こして伸びをする
トント

控えめなノックが聞こえた

「はい？」

お姉ちゃんが覗きこみながら入ってきた

「舞ちゃん、大丈夫？」

「何でもない！？」

珍しくお姉ちゃんが慌てている

「どうしたのお姉ちゃん？そんなに慌てて」

私はお姉ちゃんを見上げながら首を傾げる

「本当に大丈夫？」

「だから、何が？」

私はお姉ちゃんは何を言いたいのか全く解らない。

「昨日、頭痛いって言ってたじゃない」

「え？私が」

自分を指差しながらお姉ちゃんに聞く。

「覚えて無いの？」

こくと頷く私

「知らないよ」

お姉ちゃんはずっと私を見つめている

お姉ちゃんはゴクツと喉をならす。

「ねえ舞ちゃん」

「なあに？」

「昨日の事思い出せる？」

「何言ってるの？」

思い出せるに決まってるじゃん」

クスクス笑いながら答える

しかし、頭の中には何も出てこなかった。

昨日の事を思い出そうと、記憶を探すが頭の中は真っ白だった。

「な、なんにも思い出せない」

私は血の気の引いた顔を向け、お姉ちゃんにすが

「落ち着いて、ねえ舞ちゃん、落ち着いて」

お姉ちゃんは私を抱きしめながら優しくなだめる

「大丈夫、大丈夫よ」

「何で？何で？何で何にも思い出せないの！？」

私は訳がわからずお姉ちゃんにすがり付く。

「昨日の事だよ！」

たった12時間前の事だよ！どうして、何にも思い出せないの！？」

「舞ちゃん、落ち着いて」私はお姉ちゃんの言葉が耳に入ってこない。

今の自分の事で他の事が考えられなくなっていた。

「嫌だよ、怖いよ、嫌だよ」

私は壊れたおもちゃのように何度も同じ言葉を繰り返す。

「舞！！！落ち着きなさい！！！」

滅多に怒らないお姉ちゃんが怒鳴った。

「お：お姉ちゃん」

怒鳴られた私は現実に戻されお、姉ちゃんに焦点を合わせる。

「舞ちゃん、これからお姉ちゃんと一緒に病院に行こう？」

優しく語りかけるように言う

「病院行って何があったのか調べてもらおう？」

震える手を握り私を元氣付けようとその手に力を込める。

病院の待合室

「お姉ちゃん、私どうしたやったの？」

「お姉ちゃんにも解らないからお医者さんにちゃんと調べてもらおうね」

私を安心させるように微笑む。

『次の方どうぞ』

放送で順番を告げられる。

最後（前書き）

この話は、専門の知識があつて書いたものではありません。具合の悪い人はちゃんと病院で調べてもらいましょう。

最後

「あれ、朝だ」

目を覚ましたら私は自分の部屋のベッドで寝ていた。
まぶたが何だか熱い。

手で触れてみると濡れていた。

「私泣いてたの、何で？」

腫れぼったい目を冷やそうと私は顔を洗いに洗面所へ向かう。

リビングの前を通過した時話し声がドアの隙間から聞こえてきた。

『ねえ、お母さん。』

あの子これからどうなっちゃうの？』

『お医者様は、これ以上何も出来ないって言ってたじゃない』

お姉ちゃんとお母さんの沈んだ声が聞こえてきた。

『解らないじゃない！！』

違ってお医者さんに診てもらうとか！色々有るじゃない！！

どうしてお母さんはそんなに落ち着いてられるの！？』

お姉ちゃんの泣き声が聞こえてきた

『そんなわけないでしょ』

感情を押し留めたお母さんの声が聞こえた

『私だってどうにかしてあげたいわよ！！』

でも、あの先生は専門の先生なの。

下手にあの子の頭の中を触ったらあの子が死んじゃうわ』

『でも、死なないかもしれない』

お姉ちゃんが否定するように言う。

『ええ、死なないかもしれないわ。』

でも良くて植物人間になるだけ！！

そんなのあの子が可哀想よ！！』

私は一体何の話をしているのかさっぱり解らなかった。

でも、お姉ちゃんとお母さんが喧嘩してることは解った。

いつも仲の良い二人が喧嘩してるのが嫌で私は、止めに部屋に入っ
た。

「お姉ちゃんもお母さんも喧嘩しないで!!」

「舞ちゃん」

二人の声が重なった。

「どうして喧嘩なんてしてるの!? 嫌だよ」

私は泣き出してしまった。

お姉ちゃんが側によってきて私をなだめてくれた。

「ごめんね。喧嘩じゃないのよ。心配かけちゃったね」

「じゃ、何なの？」

私は、何があったのか聞く事にした。

「昨日の病院の事よ」

「病院？」

「そう、昨日舞ちゃんと一緒に行ったでしょ？」

「え？ 私、病院なんて行ってないよ」

お姉ちゃんとお母さんがお互いの顔を見合わせる。

「舞、大事な話があるからそこに座って」

お母さんが私を呼び向かいのソファーに座るよう促す

私は訳も解らずお姉ちゃんと一緒に座る。

「ねえ、舞。最近物忘れが酷いと思わない？」

お母さんが話を切り出した

「そうかなあ。」

私はそんなに酷いとは思わないけど？」

お姉ちゃんが一言言ってきた

「舞ちゃん、昨日とか一昨日の事思い出せる？」

何でも良いのよと言ってきた。

私は少し考えて、動きも思考も止まってしまった。

「あれ？ 昨日は何してた？ 一昨日は？」

何にも出てこない……

私は手に頭を乗せる格好のまま止まってしまった。

「思い出せないのね？」

お母さんが聞いてきた。

私は認めるのは嫌だったけどどうなずいた。

「舞、貴女は病気なの」

お母さんが何を言っているのか解らなかった

「病気って、私が？」

何の冗談かと聞いてしまった

しかしお母さんは真面目な顔で首を横に振った。

「冗談でも何でも無いわ」

一呼吸おきお母さんは意を決したように話し始めた。

「舞、貴女は病気なの」

頭の中に悪い物が出来て昨日の事も忘れてしまうの」

お母さんは話してる間、一度も目を反らさなかった

「でも、でも！病院で治してくれるんだよね？」

突然お姉ちゃんが泣き出してしまった。

「お姉ちゃん何で泣くの？私、治らないの？」

お母さん！！」

私は、だんだん不安になってしまった。

「お母さん、私どうなっちゃうの？」

「……」

お母さんもお姉ちゃんも何も言ってくれない。

「……忘れちゃうの？」

お姉ちゃんの手をギュッと握る。

その手を握り返してくれる

「全部忘れちゃうの？」

学校の事も友達のこともお父さんやお母さんやお姉ちゃんのことも！？

忘れちゃうの！？」

お姉ちゃんを見たとき肯定こうていされた気がした。

目がおよいでいて手が小さく震えていた。

私は泣き出してしまった。

「やだあ、忘れるのやだあ全部無くなっちゃうよ…
どうして私なの？」

「舞ちゃん。忘れたりしないよ」

泣き濡れている瞳で私を見るお姉ちゃん。

「嘘！忘れちゃうんだ！！」

「忘れさせない！！」

舞ちゃんがどんなに忘れたって、お姉ちゃんが何度でだって思い出させてあげる！！

思い出せないのなら何回だって教えてあげる！！」

お姉ちゃんが力一杯励ましてくれてるのがわかる。

「舞ちゃんが忘れる暇がないくらいずっと側にいるんだから。」
ギュッって抱き締めてくれるお姉ちゃん。

「お母さんだってお父さんだって側にいるんだからね忘れちゃイヤよ。」

お母さんが私の頭を優しく撫でてくれる。

「お母さん、お姉ちゃん」

お姉ちゃんとお母さんの優しさが嬉しくて、でも今の時間を憶えておくことが出来ない事が辛くて。

私はただ泣くしかできなかった。

「お母さん、舞ちゃん。」

写真撮ろう。」

お姉ちゃんがいきなり言い出した。

「写…真？」

涙の止まらない目でお姉ちゃんを見上げる。

「そう、写真をいっぱい撮って目に見える思い出をいっぱい残そう

!!
」

お姉ちゃんは嘆いている暇はないと言うようにテキパキと行動をおこした。

それから1年がたち、私は1分前の事も思い出すことが出来なくなっていた。

でも、悲しくはない。

いつもお姉ちゃん達がそばにいる。

憶えていることはできないけど、毎日、新しい出会いのようにお姉ちゃん達と会えるから。

最後（後書き）

長らく（？）読んで下さってありがとうございます。このお話はふと頭に浮かんだものです。上手く文章に出来ていませんが、そこは読んでくださっているあなた様の想像力をお借りしたいと思います。感想や誤字脱字などがありましたら、どうぞ教えて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7286e/>

記憶

2010年10月21日23時14分発行